

編 輯 室 より

最近、本會は隆盛そのものの如き活況で、會員は殆んど1000名満員の有様であるし、又、編輯室にも、いろんな方面から原稿が山積してゐる。正に會の創立以來の新記録である。只、印刷所が多忙のため、“天界”が遅れがちであるのは残念である。ことによると、今後なほ數ヶ月の間、“天界”の發送日は多少不規則であるかも知れない。しかし、その對策として、編輯部では、いろんな方面とにらみ合はせつゝ、天象欄その他、天界現象の預告は(急報と協力しつゝ)是非會員たちの手に間に合ふやう努力するつもりであるし、又、貴重な原稿を眞に活用したいと思つてゐる。又、一ケ年間の“天界”の號數は幾らか減するかも知れないが、しかし、一ケ年間の全頁數は500頁以下にならないやうに努めたいと思ふ。

御覽の通り、本號などは、戦時下とは言へ、超特級の編輯ぶりであると誇りたい。——瀧山氏の新星發見事情の確認は、何者にも囚はれない正々堂々たる聲明に等しいものであると共に、又、同氏及び一般人士に對して“報告”の重要性を物語るものである。本邊部長の皆既日蝕當日の記事は、觀測者の心理を巧みに描いてゐる。熊切氏の文は次號に完結する筈であるが、ニウカムの大著の譯文と共に、球面天文學の興味を味はせる。野尻氏の隨想は、星象學界の元老たる同氏の筆で、久しぶりに星空の美を吾人に教へる點が多い。渡邊氏の古曆行脚の文は 我が國の天文文化の跡に吾々を誘ふ。山本氏の精密星座早見の作り方は、今までに出るべく期待されてゐたものが正に現はれたのであつて、初學者も、古參者も、亦、諸學校の教師たちも、よく味つて讀んで頂きたい。山本氏は今後も此の種の教育的な文を連載される筈で、これ等は一聯の“教育天文講座”と銘打つべきものである。次ぎは日時計の解説が載ることと期待される。

觀測部に“小遊星課”が創設された。これが“せめて平山清次博士の在世中に創設されたのならば好かつたのに!”と、惜しまれる。とにかく、此の方面は永く忘れられてゐたアマチュアの研究分野であるが、是非今後の活躍が望ましい。

ニウカムは愈々佳境に入る。(但し、本號は紙面の都合により休載)多方面からの切なる要求により、これは今後每號8頁に増した。尤も、天文學中、可なり固い部分であるから、讀者は、急がず、一語々々嚙みしめつゝ讀んで貰ひたい。紙の統制のため、良書も仲々手に入らない今日、この名著が本會員たちの手に渡することは幸福である。

(1943—8—20)